

後書きに代えて（「火の音」）

今回、二冊目の作品集「火の音」を刊行することになるとは、考えもありませんでした。

一冊目の「コスモスダンス」で、メッセージをほぼ伝えたつもりでありましたので、二冊目となると、なかなかこれといったコメントがみつかりません。

「コスモスダンス」は、自分自身に向かって書き綴ってきた作品のうち五編を掲載したのですが、今回の「火の音」も、そのスタンスは変わっていません。

ではなぜ二冊目なのか、と問うてみても、はっきりした答えは出てこないのです。

特に、今回の四編が特別のものかという点、思案に陥ってしまいます。二冊目を出すという方針が（なんとか）固まっていたから、作品のどれを組上にのせるか、のせないか、何度も何度も考え、迷いました。

無責任なことをいえば、全作品を組上にのせたいし、全作品をのせたくない、という気持ちに、毎日のように揺れました。

少しだけ勝手なことをいわせていただけるならば、「私もいつか、大切なメッセージを伝えることができるように」という祈りのものと書いてきたことは、偽りのないことです。

二浦綾子さんや、星野富弘さんの作品に接し、その作品が多くの人々の胸深くに、真っ直ぐに、諄々と刻まれていくすばらしさを知り、感動ということの大切さを知りながらも、私の作品はなんと痩せていることでしょうか。

還暦を迎えたいま、「私には、特別なメッセンジャーとしての呼び出しはなかったようだ」ということに、納得し、半ば安堵しています。

それでも、私は一点、「私たちの存亡の危機」についてだけは、どうしても振り払えない思いがあります。

それは、幼い頃からの夢とも現ともつかない強いイメージとなつて、いまもたびたび脳裏に現れます。

と同時に、「そんな出過ぎたことなど、いう資格はない」ということばが身内からせりあがってきます。多分、私の夢など、たわい

のない、単なる幻影に過ぎないのでしよう。

それは、それでいいのです。

でも、私としては、ただ一つ、「畏れを知る」ということだけでも心にかけて、私なりの作品にしていきたいと思うものです。

私は、文学という語をあまり好んで用いませぬ。そういうと、また屁理屈屋というそしりを受けることでしょう。

つい、文学∥科学∥権威などといった図を描いてしまう、卑小な私の思い過ごしにしか過ぎないのだということになるでしょう。

このように、なにをいっても、なにを書いても、どう思っても、なにがしかのエネルギーとなって伝わっていくものだと思っていま

す。前回にも書かせていただきましたが、願わくば、今回の刊行にあっても、悪くはない念波を発信することができればと、祈念するものです。

二〇〇八年九月

有 森 信 二